



Q142. 「継次処理」と「同時処理」って？



A. 認知様式処理のことなんだ。

外界の刺激を自分なりに処理して理解する能力の二つのタイプがあるとされているよ。
ひとつは「継次処理」と呼ばれている能力。
もうひとつが「同時処理」と呼ばれている能力なんだ。

「継次処理」は、同じ時間に1つずつの情報が入ってきた場合に、それを順番にひとつずつ処理していくんだ。

「同時処理」は、同じ時間に複数の情報が入ってきた場合に、それを一度で処理するんだよ。
この処理のどちらを得意とするかは、人それぞれ違ってくるんだね。

子どもの場合は「継次処理」と「同時処理」というふたつの処理様式に多少の強い弱いがある、とされるよ。

でも、大人になるにつれてこの二つの処理能力はバランスよく発達してくるんだ。

なので、どちらかの処理様式に偏ってしまう指示の仕方や指導があっても、なんとかそれに対応していけるんだよ。

ふたつの処理様式の違いがとてもアンバランスだったりすると「どうして指示が通らないのかな？」「なぜこれができないのだろう？」ということになってしまう。

発達障がいのある子どもの中には、このアンバランスさが目立ってしまうことが多いんだ。

得意なこと(強い能力)と不得意なこと(弱い能力)がはっきりしているんだね。

不得意な処理様式のほうに偏った指示や指導がなされると、それを理解するのに時間がかかったりキャパオーバーしてしまって理解不能、なんてことになりがちだね。

そこで、できるだけ本人が得意とする処理様式にアプローチした指示や指導をすると、理解しやすいし許容量内に収まりやすいんだ。

長所を活用していく、ということだね。

その子どもにとってどんな指示が具体的なのか、理解しやすいのか、は大切なことだよ。

そうしてもらうことによって、毎日の生活がぐっとスムーズになっていくはずだね。

これはひとり一人違うので、個別支援計画に明記してスタッフ間で共有しておくべき事柄だね。

子どもはいろいろな経験を積んでいくことで、生きていくために必要な能力を身に付けていくんだね。

このときに、得意な処理様式を使って、強い能力を積極的に用いていくことを”長所活用型の指導”というよ。

苦手な活動や新しいことに挑戦していくときに、解りやすい方法で取り組んでいこう、という考え方がけど、弱い能力を置き去りにしてしまうわけではないんだ。

強い能力を使うプログラムであっても、弱い能力を全く使わないで済むか、というとそんなことはないんだね。

弱い能力に全く触れずに、強い能力のみで日常生活を組み立てることは不可能なんだ。

弱い能力を向上させていくために、強い能力で引っ張っていく、というイメージだね。

弱い能力や得意でない処理様式にだけ焦点を当てて訓練するとなると、習得までにとても時間がかかってしまう。

現実の生活のリズムの中で、成功に結び付いていかないことが多いんだね。

何をやっているか解らないまま取り組んでいると、トラブルになったり二次障がいを引き起こしてしまうことも考えられるんだ。

「どう理解してあげればいいのか」「どうしたら活動に参加してくれるか」と思っているのはスタッフだけで、指示が適切に届いていないかもしれないんだね。

こんな状態が続くと、本人も友だちも無駄な時間を過ごさなくっちゃいけないね。

できるだけ正確に伝えて、正しく理解できるように、それぞれの子どもにあった指示の出し方が必要になってくる理由はここにあるんだよ。

大人のほうも、子どもへの関わりかたが自分にとってやりやすい、理解しやすいものだけになっていないか、ということ振り返らなければいけないね。

自分だけが解っているのは問題で、それぞれの子どもが理解できる方法で伝えているか、ということが必要なんだね。

子どもの弱い能力を訓練しながら、その子どものどういった強い能力を活用しているのか、ということに敏感になりたいものだね。

《MENU》

[《秘密保持の原則というの？》](#)

[《欲求にはどういうものがあるの？》](#)

放課後等デイサービス支援事業
Support Project of
Day-service for After-school
At Kyoto

2023-07-24 掲載